

疼痛をもつ在宅進行がん患者の家族及び訪問看護師を対象としたランダム化クロスオーバー比較試験による遠隔看護介入効果に関する探索的研究

吉田 詩織 ●東北大学 大学院医学系研究科 がん看護学分野 助教



1. 背景と目的

近年、超高齢化社会の到来や社会保障費の増大、COVID-19の感染拡大は早期退院及び在宅医療を推進し、進行がん患者の苦痛緩和に向けた症状マネジメント支援の場を在宅へパラダイムシフトし、在宅療養を支える質の高い看護が求められている。

在宅療養していた終末期がん患者が緩和ケア病棟に移行した70%以上の理由は、予想以上の患者の容態変化であり、家族は介護に不安を抱えて、進行がん患者の在宅療養を支えている。

この課題を解決する新たなケアとして遠隔看護が期待できる。遠隔看護は、患者の日々の体調をモニタリングし、患者と家族に対してテレビ電話で相談に応じるシステムである。患者家族を対象に、遠隔看護を用いて切れ目のないフォローアップを行うため、入力がなかった場合に、患者だけではなく老々介護ともなり得る家族の状況も早期に察知することができ、高齢者人口が急激に増加する都市部における在宅医療を支える支援になり、在宅療養の安心感を確保できる。しかし、遠隔看護による効果として、家族や訪問看護師にどのような影響を及ぼしているかに関する知見は少ない。

本研究は疼痛をもつ在宅進行がん患者を対象にした遠隔看護システムの効果検証における付帯研究の位置付けであり、患者を支える家族や遠隔看護に携わった訪問看護師の看護効果を探的に明らかにする。

研究目的は、在宅療養を支える進行がん患者家族のQOL及び訪問看護師の遠隔看護実践を評価し、遠隔看護が地域包括ケアシステムにおける新たな看護ケアとなり得るか検討することである。

2. 取り組みの方法

研究方法は、訪問看護施設を対象にランダム化割り付けを行うクロスオーバー比較試験である。介入フェーズは、研究者が開発した体調管理と遠隔面談機能を兼ね備えた遠隔看護システムであるCancer Pain Monitoring Systemを用いたケアを受ける。対照フェーズは、遠隔看護を用いない通常のケアを受ける。患者の調査項目はQOLと抑うつ等であり、登録時、1週目、2週目に評価する。訪問看護師の調査項目が遠隔看護実践の効果等であり、登録時、3カ月目、6カ月目に評価する。

3. 期待される成果

遠隔看護によって、患者と家族はいつでも訪問看護師と連絡ができるだけでなく、日々の症状を見守られることにより、在宅療養の安心感を確保できる。訪問看護師は日々のモニタリングにより、次の訪問までの患者状況を把握できることで、看護介入や薬剤調整、栄養相談、リハビリ調整の必要性を、早期に検討できるようになり、患者の在宅療養継続に寄与し、効率的な地域包括ケアシステム構築に寄与することが期待される。